

アフリカ その光と影 —死線を越えてヒューマニズムにかける—

国境なき医師団ロジスティシャン 吉川 恭生

司会 講演会を行いたいと思います。今日は国境なき医師団から吉川恭生先生に来ていただきました。吉川先生は、本来は美術家で、建築インテリアデザインを教えておられます。国境なき医師団のロジスティシャンとしては1999年の5月にグルジアへ行かれて、それから同じ年の9月から10月にかけてはユーゴスラビアのコソボへ行かれました。2000年の6月から9月にはコンゴに派遣されています。実は今、下で話をしていたのですが、正直いって、ものすごくおもしろい話でした。命がけの話などもありますので、そのつもりで聞いていただけたらありがたいと思います。

それでは吉川先生お願いします。

国境なき医師団の活動ポリシー

どうも、こんにちは。今、紹介していただきました吉川です。下で散々しゃべり話のように話をしています、どこまで繰り返すか分かりませんが、今日は簡単に、国境なき医師団とはどういう団体で、それから私が続けてきたグルジアとコソボとコンゴのビデオも見てもらいながら、主にアフリカの話をしたと思います。今日のタイトルにもってきている「アフリカ その光と影」という話がメインになりますが、「死線を越えてヒューマニズムにかける」というのは、この僕の話を通して、いったいヒューマニズムとは何だろうと最終的にぼやっとでも感じていただければ幸いです。

お手もとに資料が行っていると思いますが、あまりにも膨大な量の活字なので、読めば分かる話ですが、一応大事な部分だけちょっと抜粋していいです。国境なき医師団は1971年にフランスで発足しました。ここでも書かれているように、国際赤十字という団体から分派して、若いお医者さんとジャーナリストが現場で医療に携わりながら見てきたことをこのまま黙って見過ごしていいのか、誰にも伝えなくていい

のかという、非常にシンプルな疑問から生まれた団体です。ご存知のように国際赤十字は絶対中立、公平、政治不介入を謳っているもので、現場で起こったことは口外しない。例えばアウシュビッツで餓死する人が出ていて、こっち側で医療行為をしても、起こっていることは一切口外しないポリシーを貫いてきた。最近はやっと変わってきましたが。これは非常に有名な話です。それでは事は解決しないのではないか。どンドン人は死んでいく。その問題の元凶をもっと国際的な世論に訴えて、何とか阻止する方法をみんなで考え出そうではないかというのが国境なき医師団の一番最初の発足のポリシーです。それは現在2001年になって、私も国境なき医師団のメンバーとして同じように考えていますし、とてもこのことを誇りに思っています。

後はざっと読んでいただければ結構ですが、非常に大事なことはこういう活動をするにあたって、とてもたくさんのお金が必要。それは当然寄付という形でいただいて、それを世界各国に飛び散って行く我々のような人間を介して、人々を援助する形になります。ここで1999年の財源のところを見ていただくと、個人寄付が57.8%、公的資金42.2%となっています。ここでこの数字を額面どおりに捉えて欲しくないと思います。というのは、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）からももらっています。欧州連合からももらっています。各国の政府からももらっています。しかし国境なき医師団のポリシーの1つに、1つのプロジェクト、例えばタイでいえば長期プロジェクトでエイズプロジェクトをやっています。それに要るお金がこれだけあったとしたら、欧州連合からもらうお金はその3分の1です。それを超えてはならない。例えば100億要るのだったら33億までは欧州連合からもらってもいい。しかしそれ以上を超えてはならないという内規があります。なぜならば欧州連合は政治上中立ではないと我々は思

っていますし、国連もまさしくそうです。政治上中立ではないと思っているので、その人たちが例えば、タイのそのプロジェクトに対して「そんなプロジェクトは止めてしまえ」といわれた時に、支出のうちの3分の1だったら、他の個人寄付を補填してもプロジェクトが続けられる。

この1999年にどうしてこれだけ42.2%お金が入っているかという、ご存知のようにコソボの問題です。非常に大きな社会情勢の中で大きなお金が動く時にこういう数字が出てくる。でも例えばコンゴに行くために使っているお金の80%は個人寄付です。そこに国連は関心を持っていないから88%ぐらいは個人の寄付でまかなっている。なおかつこれが最も素晴らしいというか、他の団体と違うところですが、100円寄付をいただいたら、今の日本の国境なき医師団で80円まで現場で使用する。国境なき医師団フランスだったら94円までそうする。ということはあと6円で事務方の給料を払ったり、家賃を払ったりする。それだけ効率が高い。これはぜひ覚えていて欲しいことですし、僕の話の良い悪いはさておき、寄付していただける方はぜひ寄付していただきたいと思います。とてもお金は必要です。

あと設立の経緯とか、おいおいこの辺は話の中で出てくると思いますので、とりあえずちょっとビデオが長いのですが、先にスライドしましょうか。ちょっとスライドを先にちらっと見てもらって、どんなことを私がしてきたかという概略を説明します。

グルジアにて

これがグルジア共和国。今映っていたのが直した結核病棟。これが市場です。これはアブハジア自治州。ちょっと止めてもらえますか。酔っ払っているところです。グルジア共和国はコーカサス山脈の南側というか西側にあります。黒海とトルコと、ここにコーカサス山脈があってロシアがある。僕が行ったのは、今ここで酔っ払っているのは南オセチア地区です。グルジア共和国の中で南オセチアとさっきいったアブハジア。海岸が出てきました。あれは黒海です。それがグルジアと戦争、内戦をしました。ほとんど全部壊され、非常に陰惨な、村同士で焼き討ちをするような、いわゆる近代戦争とは程遠い、鎌や鍬で襲撃するような内戦だった。そこに非常にたくさんの結核病が蔓延していた。ソ連、ロシアから独立したので、医療体制が完全に崩壊してい

る。シュワルナゼ外相というのがいました。あの人が今のグルジア人で現大統領です。非常に豊かな国ですが農業しかない。当然お金がないので医療関係者に給料を払えない。そうするとどんどん病院が荒廃していく。

結核は日本でも最近流行りつつあるらしいですが、本当に気長に治さなければならない病気です。抗生物質とかを飲むのですが、必ず飲み続けなければならない。1年、1年半とかかかるわけです。ところがその抗生物質をどう供給していくか。経済状態が全く崩壊していて保証できないので、我々が結核を撲滅するために長期プロジェクトを組みました。その一環として、僕はその結核病棟を修復する。さっきも出ていましたが、外部と内部を真っ白に塗られていました。結核菌は光にあたると5分ぐらいしか生きていない。風通しがいいと基本的にはうつらない。だから外では結核はうつりません。非常に密閉された暗い湿度の高い所にずっと結核患者と一緒にいるとうつる。だから病院の内部を全部変えてやらないと結核になっている人が治らない。

もう1つは第1次抗体と第2次抗体を持っている人がいて、たくさんの抗生物質を飲んだが、途中で止めてまた飲み出したら結核菌が抗生物質に対して抗体を作って、もっと強い抗生物質しか効かなくなってくる。第2次抗体、第3次抗体を持っている人が一緒にいると、もうこれは手のつけられない状態になってしまう。そのために酔っ払いながら病院を直している。

でもしかし、僕の宿命なのかもしれませんが、みなさんご存知のようにチェチェンという国があります。グルジアのこの辺がチェチェンです。チェチェンのゲリラたちの資金源は誘拐産業です。どんどん僕らのいる町に近付いてきた。何人も何人も外国人が誘拐されていく。ついに一番近い所まできたところで、次に誘拐のターゲットになるのはあなたたちですという所まできた。前をグルジアナンバーの車が走っているのではなくて、チェチェンナンバーの車が走っている。いつも同じ車です。下見をしているわけです。誰がお金を持っているのか。誰が金庫の鍵を持っているのか。誰が車の鍵を管理しているのか。全部僕です。これはいよいよ危ないぞという話で、完全撤退です。荷物を積んで逃げました。結局それはよかった。その後完全撤退して、その地域には国境なき医師団は全くいなくなって、今回は首

都のトビリシに残って、そこから遠隔で行ったり来たりしながら援助する。引越しのサカイさんみたいに、とりあえず荷物を全部トラックに詰め込んで逃げろとやったのですが、それを生業として知っていたけれども、非常に危ないです。というのはその地域の中でお金を持っているのは我々だけです。なおかつ我々が雇っている人たちに現金の給料を払っているのです。その人たちも現金収入がなくなるわけです。そうするとその地域の経済構造自体が完全に壊れてしまう。極秘に撤退するのを、4、5人で決めて、4、5人で準備しているが、当然情報は漏れるわけです。なぜか知らないけれども漏れる。

そうするとどんどん緊張が高まっていった、僕らが住居兼事務所に使っている所にデモ隊みたいに薬をくれと来る。あなたたちがもういなくなるから薬をくれとっているのではなくて、病気だから薬をくれという。こんな所で診られないから明日病院へ行ってくださいというのだけれども、本心としては明日僕らはここにいない。そこで一発間違っただけで暴動が起こったら我々では止められない。警察も仲間ですから、いわゆる社会の中でおかれる仲間ですから、彼らも手を出す。とりあえず一番最初の私のデビューとしてはタフなデビューでした。

もっと現実的にタフだったのは、本来ならずっと兄弟、家族のように一緒に仕事をしてきた人たちと別れる時に、さようならをいう。握手ぐらいはする。俺なんかは抱きつく方ですが、それをせずに出て行かなければならない。秘密だから。それはすごく辛かった。いまだに辛さは消えないし、パリの本部に帰った時に本部で報告書を出しました。本部のやり方に非常に憤慨しました。どうして撤退しなければならなかったのか。何度も僕はいいました。しかし国境なき医師団は命令はあまりないのだけれども、撤退の時だけは撤退という。文句があるならパリに帰ってきてからいえばいい。生きて2本の足でパリに着いてから文句をいえばいいというのがルールとしてあって、それでも文句をいいましたが、聞き入れてもらえるわけでもなく、日本に帰ってきて悶々としているうちにもう一回やろうと、やっぱり何かやり残したことがあるだろうと思った。

コソボにて

この次、これがコソボです。この家は完全に屋根が壊れていました。これがコソボで家を建てるプロ

ジェクトの倉庫です。これで人の家に屋根を建てる。個人の人の家に屋根を建てる。これはトタンです。これは国境なき医師団は初めてやりました。医療活動ではない活動です。そのために8人が世界中から選ばれてコソボに集結しました。僕もそのうちの1人で、なぜか知らないけれども選ばれて行きました。こういう銀色の屋根が見えます。これもそうです。これは僕が建てた屋根です。こうなるともうだめです。ぐじゃぐじゃでこの家もだめです。壁がぐじゃぐじゃです。子供たちもだめだといっています。これは難民に対してだめだといった時に、ブルーな顔をしています。これは病院です。

コソボに行ったのは、結局NATOの空爆でやられて、ぶっ飛んで内戦状態になってセルビア人とアルバニア人が宗教上の食い違い及び民族的な長年の、オスマントルコ時代、ローマ帝国時代からの怨念がかなりあって戦ったわけです。基本的にはむちゃくちゃでした。本当に時間がある方はこれが終わってからコソボの話をしませんが、とりあえずむちゃくちゃでしたが、すごくきれいな国で山が近くで冬はむちゃくちゃ雪が降る。それで屋根がない。このまま放っておいたら何人に人が凍え死ぬか分からない状態で、国境なき医師団はしょうがない、一人ひとりの家に屋根を建てよう。その代わりに建てた屋根の下には必ず18人の人を収容してもらう。1年間、せめて一冬は。個人のものではなく共同のシェルターというコンセンサスの下に屋根を建てましょうとやりました。

2カ月で1,000軒建てよう。建たなかったら君の話は今後歴史にも何も、年譜にも資料にも残りませんとみんなに脅されて、威信をかけて行けと行って行きました。7人がそれぞれの役目を果たして、一人ひとりの家に屋根を建てていきました。コソボはいい意味でも悪い意味でもボランティアやNGOを考える上で、すごい所でした。金沢の何々町くらいのエリアに国際的なNGOが220いました。NGOの車が渋滞してしょうがない。NGO同士のけんかが起こったり、縄張り争いがあつたりで、愛があつたりいろいろしたわけです。とても膨大なお金を注ぎ込んでコソボを直そうとした。また今マケドニアとコソボの国境地帯でくすぶっています。

僕が思うには、いつも僕らがやってきたことが根付いてない。そのお金はどぶに捨てたときまではいいませんが、今現在続いているプロジェクトもたくさ

んあるが、非常に物質的なお金の使い方だったと思います。例えばカンボジアのプロジェクトを考えるとやっぱり物質的だと思います。カンボジアでは人々の心に何かを伝えて、彼ら自身の復興の力を支えるような援助の仕方をしているのだが、コソボは本当にNGOのショールーム、デパートみたいな感じがしました。

一応ここでもうちょっと進めます。ずっとコソボの写真です。何か神戸の震災の時を思い出しませんか。これはブルーシートで屋根を囲って。子供はよく働きます。この字は読めますか。これもまた後で見たい人がいたら写します。

コンゴにて

これはアフリカです。ここからコンゴです。僕がコンゴに行ったのは、やっぱり病院を直せということです。コンゴは2つあって、コンゴ共和国とコンゴ民主共和国とがある。コンゴ民主共和国は旧ザイールです。もっと言うとザイールは旧ベルギー領です。コンゴ共和国はフランス領でした。これは床を直しているところです。コンゴ共和国の方の内陸部にミンドウーリ州があって、そこがアフリカで非常に良質のマリファナが採れる。大生産地です。そこにニンジャというのがあります。もうすぐ出てきますが、ニンジャというゲリラがいて、マリファナの流通を取り仕切っていた。ところが政府の中に3人くらい大統領を狙っている人がいたが、政府が「俺たちにその利権を渡せ。お前らだけおいしいところははずい」と、取締りを始めました。そうすると彼らはニンジャですから、一瞬のうちに瞬間移動ができるわけです。ここにいたかと思うともう向こうにいたりするわけです。ジャングルの中では本当に消えるようなニンジャがいる。もうすぐ出てきます。彼らが内戦を始めた。

それで政府軍は、車ではものすごく行きにくい所はヘリコプターで爆撃する。そこでヘリコプターを竹槍で打ち落としたりストップする。これです、ニンジャと私です。真ん中にいるのが私で、僕の左隣、隣の隣の人が、ムッシュ・クレバン。彼がニンジャのナンバー3です。ナンバー2はここにはいないのですが友達です。ナンバー1がいて、その人がある日突然、「お前たちはニンジャだ」と神のお告げを受ける。何かすごく厳しい戒律を作って、月曜日には爪を切ってはいけない。火曜日にはセックスしては

だめだ。水曜日には鳥を食べてはいけない。そんな戒律が何の意味があるのだろうかと思うような戒律を作るわけです。非常に厳しく、もし破ったら、月曜日に爪を切ったら指が1本なくなる。彼らには鉄砲玉は届かない。こういう何か傘の柄みたいなのを持っていて、基本的にはニンジャは宗教団体だけれども、キリスト教から生まれたキリストを信じる宗教団体で、十字が傘の柄みたいのにくっついていて、これを持っていると玉が当たらないというわけです。「信じないだろう。でも俺は生き残っているではないか、俺はあの内戦を生き残った」といって、みんなそれを持っているわけです。それから髪の毛はよく分からないかもしれないけれども、大仏さんみたいに丸まっている。それは何か理由があったと思いますが、これはスポンジに水をつけてこうやるとそうなるのかという戒律を守っている。彼らが戦争を仕掛けて、政府軍と内戦になって、基本的に勝った。勝ちとか引き分けとか。その一番最初に戦争になったのが今そこに座っていますが、そのミンドウーリという町です。だから一番激しかったわけです。

そこに内戦が終わった段階で国境なき医師団が初めて入りました。その時にこの辺まで草が生えていたみたいです。僕はその時その部隊に入っていなかったのですが、完全に人っ子一人いなくて、みんなジャングルに逃げ込んで、食べるものがないので森の中の食べられるものすべて食べる。動くものはすべて食べる。食べられる葉っぱはすべて食べる。そういう状態でずっと3年ぐらい過ぎたので非常に栄養失調が激しかった。最初にミンドウーリに入った時に病院を見つけて、病院をまず動ける状態に戻して、そこに囲いをして緊急栄養補給センターを作りました。CNPといますが、それを運営していきながら、今度はいろんな所から人が集まってくるわけです。国境なき医師団が来たからにはもう戦争は終わったといっって、村が復活します。市場が立ちます。子供たちの笑い声が聞こえます。そうなってくると、どんどん栄養失調の人が現れる。その人たちを收容しながら活動していく。

ちょっとビデオを見せてもらえますか。ちょっと長いので、34分ぐらいあります。

(ビデオ放映開始)

これは着いた日です。ミンドウーリに着いた。これは絶対したらだめなことです。僕は初めての人間だから誰も文句をいわないだろうと。これは第1回目のスタッフです。この車を覚えておいてください。後ほど分かります。お前も手伝えといわれているのですが、僕はジャーナリストだといっています。これがニンジャによって爆破された橋です。直したのですが、渡って大丈夫なのか。基本的にはこの地域には車が4台ぐらいしかない。そのうちの2台がうちの車だから、たぶん後2台は通った形跡があるから大丈夫だろうと。

これが今いていた緊急栄養補給センターです。オレンジで囲ってあるのはサッカーコートです。というのは栄養失調は病気ではないので日常的生活はできるわけです。子供たちには子供たちの遊びを与える。これは病院の方ですが、病院の付き添い人が野宿しています。これは後で出てきますが、これも病院の一室を占拠している。この状態をよく覚えておいてください。これも後でどう変わったら分かります。

ペンキ屋のエリックです。彼は薬局のビルです。

これは状況がどんどんよくなっていて、テントを不必要になってくるわけです。栄養状態がよくなって退院していくとテントが要らなくなるので、そのテントをもう1回きれいに洗ってたたんで直して南スーダンに送る。南スーダンはコレラの発生している難民キャンプがある。だいたい1個300キロぐらいの重さです。

これはタイムトライアルをやりますよといっています。優勝者にはお酒を1杯おごります。全病院中のレースです。

これはシャワールームです。シャワーに入るか死ぬかどっちかだと。このおじさんは1日中ずっと塩素消毒をする人で、僕らが雇っている人です。これはパトリックといつて、僕らの仲間で、内科のお医者さんです。65歳。

この男の人はここには確実に死ぬ。ただここでは治療ができない病気なので首都まで電車で送ります。搬送準備をしているところです。ところが首都に着いても助かるかどうかは半分半分です。だいたい週に4、5人こういう形で送っています。

首都からミンドウーリまで、だいたいこういう距離感ですが、ここが8時間かかる。こっちからこっちは行けません。この内乱で川があつて壊れてい

るから。列車も走っています。

これは外科病棟です。この新生児は病気です。この子は元気だけれどもお母さんが産後のひだちが悪いからここにいる。本来なら産科病棟に行ってもらいたいだけれども入れないので。すごくかわいいでしょう。この子は下痢して病人ですが、この子は見て分かるとおりに栄養失調でエイズです。基本的にはまだ発症はしていないのですが、もっと合併症みたいにいっぱいいろんな病気が付帯しているのかもしれない。最終的に死にました。

これが産科病棟。こっちは側はベッドがあつたけれどもこっちはない。

非常に大事なのは彼が診るだけではなくて、こうやっていつも現地の、コンゴならコンゴの看護婦さんと一緒になって診て、こういう症状の時はこういう処置をした方がいいよとか、これはこうだよ常に教えながら診る。「どうでしたか、よく寝られましたか」と聞いている。その話し方も1つひとつ彼らに伝わっていかないとよくない。僕らはずっとそこにいるのではなくて、いずれは本国へ帰るわけです。長いか短いかだけの話です。

ダンボールを持っています。あれはなぜ持っているかといったら、ダンボールの上で寝る。それがなかったら地べたで寝なければならない。アフリカは赤道直下なのですごく暑いと思われがちだけれども、僕がいた6、7、8月はだいたい昨日今日の金沢よりも涼しいです。朝晩は寒い。毛布を着なければならぬ。

これが待合室。これに注目してください。何かいっぱいものがおいてある。あれは靴が片一方おいてあります。看護婦さんが来て、「この靴誰の?」というと、「はい私の」といったら「じゃあ入ってください」となる。診察券代わりみんな何か自分のものを置いていく。

彼は一生懸命しゃべっているけれども、教育している。「ちゃんとご飯を食べる前には手を洗いましょう。トイレに行ったらちゃんと手を洗いましょう」。手からうつる病気もたくさんあるので、それもすごく大事なことです。

これは僕はミーティングをしているところです。毎日こうやってみんなが集まって、仕事の打ち合わせだけではなくて個人的なこと、「うちのかみさんが昨日怒っていた」みたいな話を含めてみんなを話しよう。困ったことも楽しかったことも。そうす

るとすごくタイトな人間関係ができて、ここ一発で頑張れるかという時にみんな「よしっ」となれる。

彼はテント張り替え屋さんです。とても高いものです。すごく長い年月使うテントなので、ものすごく大事にしています。1カ所で使い切らないで、どんどん張り替えていく。そして屋根葺きが終わった場面です。外壁を塗っています。これは僕の前の人が手掛けた仕事の残りを僕がやっているだけで、こんなことをやるのはナンセンスだと思うのだけれども、やりかけたことだから最後までやって完成しましたが、僕のポリシーには反している。これは全部壊れたテントを外に出して直している。

これは僕がかかった床を直す仕事です。今現在僕がこの建物に触れているのはどこかというと、足の裏だけです。病院内で一番感染する可能性が高いのは床からです。咳をした時に痰が落ちました。下に落ちました。それを踏みました。と考えるときれいに掃除しやすいようなスムーズな床を作ってやるのが、まず病院作りの鉄則だと思います。

さっきいったみたいに毎日ミーティングをしていると、僕は大工だけど大工の仕事がない時に左官の仕事を手伝うよとなってくる。人手のいるところにみんなが全部手伝おうとなる。俺も自分の仕事の持分が終わったからちょっと休憩というのがなくなる。そうすると3倍くらいのスピードで仕事ができる。僕は人使いが荒いのではなくて育てるのが上手。

これは貯水タンクです。国境なき医師団は必ずこの貯水タンクを使っています。彼が今右手に持っているのは塩素です。彼は我々が教えた分量の塩素を入れて、あの容量の水に対して何%の塩素消毒をすれば、飲み水になるかを知っていて、それをやっている。これは着いた日なので彼の仕事ぶりを見ながらビデオを録って、何も知らない顔をしながらいろいろ質問をして、彼の答えてくれたのは完璧でした。

これは保育園です。栄養補給センターの中の保育園です。さっきもいったみたいにみんな病気ではない。栄養が足りないだけで元気です。ちょっとずつ元気になっていきます。あの女の人は僕らの友達、同僚の彼女です。あの今歌っていた子の頭の髪の毛は黄色いでしょう。金髪です。あれは染めているわけではなくて、栄養失調の顕著な症状です。本来なら真っ黒でちりちりなのが金髪になってストレートヘアになってくる。

これが僕の右腕のアランです。これは道具を片付

けている。私が教えたら負けるといやだから。アフリカでは負けず嫌いというシステムはありません。必死になっている。終わったら踊ってもいいし、早く終わったら有効な時間が使えるというのは僕の考え方です。すごくおかしいのはコソボの時もこのビデオカメラを持っていった。コソボの時はビデオカメラを向けても人々は感動しない。やっぱりヨーロッパだなと思いました。文明国というのはいい意味でも悪い意味でもほとんど悪い意味だけれども、ここは文明国ではない。彼らは違う。カメラを向けた瞬間に回っていようと回っていきませんが、「録られている。俺は映画スターだ」みたいなので、仕事はするわ、歌は歌ってくれるわ、踊ってくれるわです。

これは栄養失調の一番悪い人を第1テントから二番目に悪い人の第2テントに移した。この人たちは看護婦さんです。衛生状態について話を聞いています。これはモザイククリニックといって、車で2、3時間か4時間ぐらいかけて行って、そこでそのある1つの村の周りの状況、どういう健康状態、栄養状態なのかを調べる。すごい年寄りとか小さな子供が1人で歩いてミンドゥーリまで来ることができないので、僕らが出掛けて行って状況を知る。ひょっとしたら、そこに重点的に何か選択する必要があるとか、もともとあった保健所みたいな所を建て直して、一時的に我々が給料を払って、看護婦さんを送り込む必要があるのか。これは腕を測っています。この状態では正確にはいったい何センチの身長があって、何キログラムか分からない。完全に栄養失調です。それでやっぱり金髪です。

彼は看護士です。子供に全然力がない。この人は何か連れていったみたいです。首都の病院まで。ところがそこで金銭的にできなかったのが帰ってきた。それで僕らの判断でやはりだめで、ミンドゥーリの我々の病院に連れて帰っても治らないので、連れて帰ってそこから電車に乗せてまた首都まで。これは車で8時間だけれども、列車だったら24時間かかる。これはミンドゥーリの電車の駅です。ここにカメラが入ったのは初めてです。僕は何回もエスコートをしていて、兵隊さんと友達になったので録ってもいいよと。この状態で24時間です。これも軍隊の取り計らいで先頭車両に他の人を乗せない。

これは4人の酔っ払い。みんな目がいつている。夜はこう過ごしています。電気がないから。

これは市場の予防注射です。朝の6時頃です。「集

まってください」といっています。9カ月以上の子供たちを集めた。我々の優秀な予防接種チームです。彼らは最高です。ここで1日にだいたい2,000人くらい来る。これでも混乱しないようにしているけれども、彼らは全然そんなことがない。きちっとしている。受付に村長さんがいます。彼女がうまい。これは全員でやっている。子供たちは何かいいことがあるのだろうと来る。何か今日はきれいな服を着せて、みんな着飾ってくるのはお母さん。何かいいことがあるのだろうと思って行くと、違う。出て来たら、僕らの顔を見たら泣きそうになる。

ワクチンは基本的に温度管理が非常に難しい。冷蔵でもないし、冷凍でもないし温度が下がり過ぎるともうだめだし、上がったから急激に冷やすとまただめになる。常に同じ温度でないとだめです。さっきいったみたいに電気がないのでどうやって冷蔵するか。日本でも市とか県は持った方がいいと思います。アルコールランプで後ろのガスを温めて液化させて全く冷蔵庫と同じように使う。アルコールランプ、いわば石油ストーブみたいなものだから石油ストーブの青いきれいな火がまんべんなく出ていると冷える。ちょっと火が大きかったりすると出てきたその横にバックミラーが付いていて、見ながら調節して、芯を切ったりとか水平にしたりとかアルコールとか石油をフィルターで濾したりとか、そういうことをやりながら温度管理をしていく。その温度管理は僕の仕事です。本当に注射をするまでのことは医者とか看護婦の仕事です。日本では昔から石油ストーブを使っているから、僕らにとっては全然異質な行為ではなくて、結構簡単にコントロールできたりする。ところがヨーロッパの人は全然できない。ほとんどもうセントラルヒーティングです。だから石油ストーブを触ったことがない人がほとんどです。僕なんか石油ストーブがまだ家にあります。だから芯があつてがたがたになったら調節する。

あの分娩台があるということは、この病院はかなり高度な医療を行ったと思われる。これは一番最初に出てきた店の人が選挙に出るといったところです。これは僕が直した所です。パリの郊外の診療所よりきれいだと思います。

これが栄養補給センターの台所です。これでお粥みたいなものを作って食べさせる。病院も同じように入院している人に関してはここで作ったものを出さなくてはならない。

今歌っているのは僕のテーマソングらしいです。女の人たちが歌っていたのは、やっぱり僕の歌だけれども、恭生は昼間よく働いているが夜はちゃんと働いているのかと。そんな働き方次第だったらこっちへよこせ。お前らのボスをこっちへよこせ。おもしろいです。「ヤスは戦う」とかいう歌を歌っている。僕にはよく分からない。

これは無線です。だいたい30から40ぐらい退院していくといっています。もうそろそろ緊急栄養補給センターを閉める時期だなという話です。

これはお金を払っているところです。今さっきちょっと映ったお金をもらった人を覚えておいてください。これは全員栄養失調児です。これは我々MSFチームです。彼らは一番最後に出てくる平和の列車というシーンがあります。その時にステージに上がってヘリコプターの踊りをしてくれました。何かユニセフが特別賞を与えたいらしいです。セクシャルな踊りでしょう。セクシャルな踊りだと思って見る人は非常に正確です。これはもう終わりだそうです。

これはユニセフが仕掛けました。やっと内戦が終わってあちこちでゲリラがいたけど、みんな仲良くしようといつて、このポアントノアールからブラザビルまで列車を走らせました。ここに川があるのですが、ここの橋が一番大きくて、完全に破壊されていた。ここからこうは行き来して、ここからこうも行き来していたのだけれども、結局ここは開通していなかったわけです。こっちは石油基地で経済の中心です。こっちは首都で政治の中心です。こっちからのお金が流れないから、この辺は大変なことになっています。それでこれが開通したことによってコンゴは安定化に向かったわけです。今の列車がこっちからこう走ってきた。そして今インドゥーリに平和の列車が来ています。そのヘリコプターの踊りをやってくれた彼らは本当にひどい状態の子もいて、見るからに貧しい格好だけれども、踊り的には古い人々を感動させたみたいで本当に平和の祭典としてはよかったということになった。

結局インドゥーリから始まった内戦がこう広がるのだが、こっち側にはあまり広がらなかった。こっちが当然首都なので、こっちへ広がっていった。この辺にも広がっていくのですが、基本的にはこのインドゥーリというのは中央アフリカで一番最初に電気が引かれた町です。だから非常に豊かな所だったらしいです。ところが今全く見る影もありません。

ちょっと時間が迫ってきました。今見ていただいても分かったと思いますが、結局栄養失調になる原因であったりとか、栄養失調の人だったりとか、その人が列車に乗っていく姿であったりとか。実際僕は死んだ人を録る勇氣というか、録ることはできなかったが、毎日目の前でばたばたと人が死んでいく。本当に暗いところがあるかと思えば、こうやって非常に明るい、何もなくてもというか食べ物がないでも非常に明るくしていける状態、生き生きしていける人たち、2つあると思います。

アフリカにおける内戦・飢饉の構図

僕がまず一番最初にいいたいのは、なぜアフリカでこういう状態が起こるかということです。それは非常に簡単な構図で、当然冷戦があったことです。1989年冷戦が終わったのが、それまではいわゆるどう支持するか。例えばそのアフリカの諸国の人たちが国としてソ連とアメリカのどっちにあなたたちはつきますかと迫られる。なぜかという国連の加盟国のいわゆる議決権というか投票権をどんな小さな国でも1つの国ごとに持っている。そうすると自分たちのいうことを聞いて欲しいから援助する。「お前はアメリカの援助を受けたいのだったら、国連の時はよろしく頼む」という圧力をかける。ソ連も同じです。ところが当然冷戦がぱっとなくなった瞬間にその援助がぱっと消える。一瞬のうちになくなった。そうしたら構造的にずっと植民地支配を受けてきて、何も働かなくてもといういい方は変ですが、いわゆる社会資本に対する整備の考え方が非常に薄かったアフリカで、莫大な地下資源が埋蔵されている国で、それを全部取って搾取した植民地支配があって、それが終わって独立したが、今度は援助づけで、なおかつ援助を受けるけれどもまたその国に地下資源を取られていく。それがなくなった瞬間に、それでは石油はあります、ダイヤはあります、金も出ます。どうして掘ったらいいのか、という話になるわけです。そうすると非常に不安定な政治勢力がいっぱいできてきて、どんどん隣の国でもっと探ろうと内戦が起こる状態が非常に多い。

その中で彼らの持っている、アフリカの僕が行った地域の人たちはある種動物的というか、とても生きることに対する執着心が強い。だから逆に殺す時も残忍です。ところが逆に生きることに対する気持ちも非常に強い人たちだから、一番光の部分は僕た

ちには結局与えることはできないものだと思います。それは何かというと、逆説的にいうと例えば病気になりました。歯が痛い。何とか歯が痛いのが治ってくれると嬉しいのだけれども。歯が痛いのが治ったらあなたは幸せですか。幸せとは感じないだろう。彼らも同じで病気になったことが治って嬉しいが、それが幸せとは思っていない。それではものは持っていないが欲しいと思う。例えば車が欲しい。あなたは車をもらって嬉しいですか。幸せですか。今車をもらったらすごく幸せだ、という人がいるかもしれない。でもそれを持った瞬間にキーを回して、エンジンが回って、ハンドルを握った瞬間に次の幸せを望むでしょう。だから僕らは医療NGOですから、病気を治すにはいろんなことをするが、そうでない側面の方が多い。というのは彼らの方が実は幸せで輝いていて、僕らは彼らの中の一部の不安材料を取り除いてあげるためだけに派遣されている。でも実際それで亡くなったりすると僕たちは非常に落胆するが、隣のお父さんはさばさばしている。自分のかみさんが死んでいるのに。さばさばしているといういい方はおかしいかもしれないが、人前でそんなに涙を出さない人たちなのかもしれないが、僕らのように感情を表に出さない。

僕は何がいいかということ、本当に病気を治してあげることによって人々が幸せになるのだと思っていたにもかかわらず、そうではなかった。それでは彼らが持っている光とは何だろうと考えていったら、やっぱり愛です。子供に対する愛情。例えば隣人というか、自分の周りの人たちに対する愛情。神に対する愛でもあるかもしれませんが。神からの愛もあるかもしれませんが。非常に信心深い面もありますが。彼らは本当にそういう意味で不幸な人ではない。

ただ不幸の元凶を作ったのは我々だということは事実です。私たちは東西冷戦なんか知らないという話はどこかでできるのかもしれないが、僕はたぶんさつきもいったように文明人としてというか、いわゆる国際社会の一員としては我々も同じ穴のムジナだという気がします。だから原因を作った人は私たちで、助けに行っている人は私たちで、実は確かにいろんな援助をしてもらって嬉しいのですが、彼らはああいうふうに歌いながら、踊りながら淡々と生きていくわけです。そこに行った私はとてもたくさん光をもらって帰ってくる。ただ本当に暗い部分もあるかもしれないし、あったと思うし、今現在も

大変だとは思いますが。そういう意味では実は彼らの方がしたたかというか、生物サイクルの中の淘汰みたいな中で本当に喜んで生きています。

ヒューマニズムとは何か

もう1つは、最後に今さっき電車が走りました。ここが開通したと。僕らの方がヒューマニズムにかけているわけです。かけているといたら変かもしれませんが。一般的ヒューマニズムといわれることに。僕はあまりそう思ったことがないのですが。みんな僕らのことをいい人だと思っています。ユニセフがここから列車を出しました。彼らもヒューマニズムにかけているわけです。

僕はユニセフが大嫌いです。大嫌いですがかけている。ミンドウーリで止めて何をしたかという、貨物車いっぱいの靴、いっぱいの机、いっぱいのノート、いっぱいのぬいぐるみを差し上げます。その受取人は国境なき医師団ですというわけです。僕はそんなもの受け取りません、要りません。何でかという、それをもったら配らなければならない。そんなものを僕らが持ってもしょうがないわけです。配るのにどういう原理原則で配るのか。あなたは3歳だから3つ。あなたは5歳だから5つ。どういうふうに配るのか、全く何もなし。事前の相談もなければ、そんなもの暴動が起こるのは目に見えているわけです。俺は絶対にそんなもの要らない。

車がさっき見えただけでも、4台あって、うちの車が2台あって、もう1つのNGOが空腹を克服するアクションCというフランスNGOで、それが鶏を飼ったり、ウサギを飼ったり鼠算式にウサギは繁殖力が高いから飼う実験をしてそのウサギをタンパク源としてその地域の人たちに栄養改善してもらおうと。それでやっぱりニンジンも要ると、ニンジンを隣に植えていたりする。その彼らがあって、僕らがあって4台あった。それでトレーラー4台分の貨物が来た。動かさないわけです。しょうがないから、僕らが要らないといたので、アクションCの女の人が断りきれなくなって受け取ることになりました。運ぶのを手伝ってくださいというので、しょうがないので手伝いました。案の定暴動が起きました。

それがヒューマニズムなのですかと僕はいいたい。与えるものが物質的であればあるほどそこには憎悪を生むわけです。だからそれは本当に君らは何を考えているのかと声も出ないくらい腹が立ちまし

たが、とりあえずそういうことがありました。

その後どう配られたかを僕は知る由もないのですが、なぜかというときさっきこの車のことを覚えておいてください、さっきお金を払っていた人のことを覚えておいてくださいといいましたが、その3日後に僕は最後の任務として、もしももう一度ブラザビルで暴動が起こった場合、ここに飛行場があります。ここから飛行機が出ます。こっちにもあります。国際線が来るような。それでここがコース上はこんな感じです。ここは4キロくらい。もしもここで暴動が起こった場合、我々はどうやって逃げるか。ここからここまで車で8時間かかる。それでここから飛行機で逃げるのですが、ここで暴動が起こったら、一番可能性は高いのですが、こっちへ行ってもだめです。どこへ逃げるかといったらこっちしかない。隣国のコンゴ民主共和国。ここは10年間、内戦の間ずっと放ったらかしだから道がなくなっている。なおかつここに基地があったから、この平和の列車が来るまでここに軍事基地があった。平和の列車が走った時点でこの基地はなくなりました。指揮官と話をして通ってもいいという話なので、僕はこの道を確認するために最悪の脱出路を、車で脱出できる路を確認するためにここに行きました。ここで捕まりました。国境侵犯で。隣で今戦争中なので、国境が閉まっている。キンシャサだけビザを持って入れれば入れるのですが、結局ここで捕まりました。

国境警備隊に捕まって

ここから延々と11日間拘束されて、軍隊のピラミッドでいうとこれが一番偉い人です。この辺で捕まっている。それで一段ワンステップ上がるごとに基地がある。ここから俺では判断つきかねるからと、全然この辺ぐらまで無線がない。ここから無線もあって車もある。ここには全然何もなし。だから通じない。こっちは通じているが、僕が捕まった時点で暗号で連絡を入れているのでパリから救出隊が飛んできた。こっちにキンシャサがあって、川があってそこにいて、そこでトップが会談して早く釈放するといっているのだけれども、無線がないから通じない。それで私では判断致しかねますから私の上司にいつってくださいとここに来る。それで「俺が上司だ」とかいて、この人がうんといったら解放されると思って賄賂を渡して、「解放してください」というと、「俺がうんといえれば世の中なんともなる」と

いった感じが次の日、「俺では判断つきかねる」という。俺もついていくから次のところへ行けというわけです。それで次のところへ行った。今までこの人が一番偉い人だと思っていたのが、「指揮官殿、連れてまいりました」とかいて、「お前うそつきだな」というのがずっと続くわけです。それで最後の最後にここに着いてスパイ容疑で終身刑といわれました。それは理不尽ではないのかということですが、そういう宣告を受けて最終的にどういうわけか、釈放されました。

捕まって結局釈放されますが、この間僕はどれほど楽しかったか。楽しい苦しいというすごく複雑な気持ちです。嬉し楽しというか、結局みんないい人だと。この国境警備隊のやつは一番だめだだと思います。こいつはわけが分かってなかったと思いますが、次から次へと指揮官が変わっていくが、それがすごくいい人たちです。彼らは僕を捕虜として思っているわけではなくて、僕たちは車も持っているし無線も持っているから他のゲリラに取られるのではないかとまじめに考えていたような節がある。だから守られていると。ロケット砲を横で持って「お前を守ってやる」からと。そんなの要らないという気持ちになるくらい頑丈に守ってくれる。国境なき医師団の車には、ここにこのマークの大きいやつ「No weapons」とか「No guns」と書いてあって、車に絶対載せないというポリシーがあるが、そんなの平気でピストルは持っているわ、ロケット砲は持っているわ、機関銃は肩からかけているわというのが横にさっきのピックアップバンに乗って僕を挟んで行く。ここからここにたどり着くまで1,500キロくらい走りました。僕がパリ・ダカールラリーに出たら絶対優勝できます。

その間に僕が持っていた兵隊さんの感じ、武器を持っている人は悪い人だと僕は基本的に思っていますが、みんないい人だった。すごくヒューマンです。僕は中立で政治、宗教何事にも左右されることなく人々を助けると国境なき医師団の憲章にも書いてあります。でも軍隊は差別していました。お前らは人殺しだと。本当に人殺しだからだめかもしれないが、人殺しだけでもヒューマンだ。そこがとても大事だと僕はつくづく思いました。ワンステップ上がるたびにエスコートする人間は変わるが、その人たちが「お前は絶対にいいやつだ。恭生はスパイなんかじゃない。お前を絶対早く解放してやる

から」とずっといい続けてここまで11日間かかるのだけれども、でもそのたびに、ひょっとしたらここでだめだったかもしれない時にスイッチをよい方へ倒していったのは彼らです。というのは軍隊と移民局と秘密警察と警察がある。一番性質が悪いのは移民局と秘密警察。その人たちにも事情徴収を僕は受けているけれども、その時に巻いてくれた。「恭生、逃げるぞ」とかいて、「逃げるぞ」とはいわないけれども「行くぞ」とかいて。「でもあの人もしょにょに来るっていついたよ」といったら、「あいつらは勝手に自分で来ればいい」といって振り切ってくれたりするわけです。彼らはよく知っているわけです。あいつらに捕まったらもう出られないと。そういうことが何回もある。長くなるので端折りますが。

その時に自分が何かヒューマンイズムが、僕はこのことが死線を越えたかどうか分からないけれども、自分が活動でヒューマンなことをしている時に、ヒューマンイズムをやっていると思っている時に、相手がどう思っているのだろうかということです。だから「俺は国境なき医師団だ」みたいな話は、「いや俺は軍隊で機関銃を持っている」みたいなこととよく似ているのではないかと。それはやっぱりだめだと思います。本当に死線を越えて初めて分かった。今までそれが自分の中で言葉遣いであつたりとか、後で機会があればコンボの話をしたいのですが、誰の家に屋根をかけるかという判断を僕はする人だったけれども、嘘を見抜いて裁く人だった。その非人間的な行為が僕のヒューマンイズムだった。でもやっぱり自分の心の中でどこかおかしい。なぜ僕が人を裁いているのだろうかという気持ちが常にあったのだけれども、今回コンゴへ行って捕まってあれでよかったのだ、ばしばし裁いてやってよかったのだと思いました。

時間が来たので、多数の方がお残りになるのを信じて一応終わります。僕は基本的に今日金沢に泊まりますのでお時間のある方は。質問のある方は個人的にいつかきかせても結構です。

後半—再びコンボにて

それでは続きというか、今ちょっと外でも話をしていたのですが、国境なき医師団になるにはどうしたらなるのみたいな話もあつたり、それからあなたはいったい何をしている人ですかという率直な質問があつたりしました。僕は実は彫刻家です。いわ

ゆる一般的に分かりにくい現代美術をやっています。それなり生きてはいけるので、作ったら売れるかなという感じです。ただ作るのが夏は暑い冬は寒いし、多作なアーティストではないのは確かです。

でも個人的にどうして国境なき医師団に参加されたのですかと聞かれて、面倒くさいからと。阪神大震災の時にボランティアをしていて、ボランティア中毒になったわけではないけれども、そういうのもある種のきっかけですという答え方をすると、もう1つは僕はアートの世界にずっと生きてきて僕は41歳ですが、子供は2人いてかみさんが1人だけいますが、コンゴにはいませんが。そういう話も後でしますが。非常に複雑に合意した世界に生きているわけです。例えばこういう女の人はきれいだというわけです。今日もきれいな人がいらっしゃいますが。この女性はきれいだとみんなで合意しているわけです。こういうのはかっこいい。みんなが合意しているわけです。ところが僕の中にはそういうものはどんどん消え失せていってしまった。「本当にこれはいいのか。こんなものはおもしろいのか。みんながいいといっているが、どこがおもしろいのか。」と自分にどんどん問い掛けていった時に、非常に高度に合意の上に成り立っている社会の中でいったい私は何を造ればいいのか。ということは僕もその合意社会の中にどっぷり首を突っ込まなければならないのか、となった時に、いや、そんなはずはない。もっと率直な感情を持った人たちがいて、もっと思いきり泣く人がいて、もっと思いきり笑う人がいて、俺に正面きって嘘をつくやつがいる。まじめに僕に対して嘘をつく人は日本にはいません。その代わり本当のことをいってくれる人も少ない。本当の涙を見せてくれる人は少ない。それを見たいと思ったのが国境なき医師団に参加したきっかけです。そういう人に会ってみたい。それは非常に個人的な理由です。だから僕のアートと国境なき医師団は同一線上にある。アーティストとしての吉川恭生と国境なき医師団としての吉川恭生はこうあるのではなくてこうある。ということでちょっとビデオを見ましょうか。これを入れてもらえますか。

これはマケドニアです。これがコソボのペアです。このペアという町は、コソボのNATOの空爆があった時に一番ひどかった。NATOの空爆が終わって一番最初にここに入ったのが我々国境なき医師団でした。偉いとは思わない、かっこいいと思います。

こういう状態です。これは直せる方だ。これは全壊です。これは屋根だけが落ちています。まだ死体が残っている。これはカテゴリーコールといって建てなおす可能性のある家。鳥の鳴き声が気持ち悪いです。結局こういう状態です。屋根がもう完全に焼け落ちてしまっていて、このまま冬を迎えると雪でだめになる。

あの白い帽子をかぶっているのがムスリム、イスラム教徒です。基本的にアルバニア人はイスラム教です。セルビア人はセルビア聖教という、ロシア聖教の、ギリシア聖教の流れを汲んでいる。宗教戦争の節もある。これはすごいでしょ。電気が割れずにひん曲がっている。火炎放射器で一瞬のうちに融けている。これはなぜまだ燃えているかというのと、これは仕返しです。アルバニア人が残っているセルビア人に対して。

これはパリです。これは僕が国境なき医師団の研修を受けた時です。ここでみんな待機をして出勤を待つ。これは今トレーニングをしています。コミュニケーションのトレーニングです。これはいったいあなたたちはミッションに行く時何を持っていくか。何をリュックに詰めますかといっています。

これがロジスティックセンターといって、ここにすべての物資が通関済みでどんどん空港の内部にあります。通関済みでこういう状態で。すべてではないです。これはキットといって、例えば僕がこういうものが必要だとオファー、注文を出すとここでキットにして飛行機で送られる。首都まで行って、そこから行く。すべてのものがキットになっている。賞味期限とかあるものは全部毎日入れ替える。

これは再びコソボです。彼はオーストリア人です。この青い服を着ている人が村長さんです。村長さんが一番村の状況をよく分かっている。誰が金持ちで誰が貧乏か。貧乏な人に屋根を建てるわけです。村長さんも人間関係があるから正直なことをいわない場合がある。うまく彼とコミュニケーションがとれるとうまくいく。これは今入った家です。お米があります。見て回るといろんな物が隠してあったりする。

これは小さい女の子がレイコちゃんです。彼女はピースリングジャパンでコソボに来ていたのだけれども、お手上げ状態で「恭生君、手伝って」といっています。その部屋で10何人生活しています。ここに屋根をかけてもいいよといっているのだけれども、

彼らは拒否する。なぜならばこの家には住みたくない。

これも全部ここで銃殺されてここで焼かれる。アルバニア人がやられる。結局人口比率がコソボ自治州、今自治区といわれていますが、人口比率の9割がアルバニア人で1割がセルビア人だったのですが、セルビア勢力をユーゴスラビアはセルビア人に対して公職を任せて、アルバニア人は公職追放する。そうすると警察とか全部でアルバニア語の教育を一切ストップする。それでも人口比率は変わらないので最初はどんどんセルビア人を移住させる。例えば警察とか軍隊、コソボの。ところがそれでも人口比率は変わらないから今度はジェノサイドといって民族浄化をする。片っ端から殺していく。殺すと人口は減るから、人口比率が高くなる。そういうやり方です。間違ってもらおうと困るのは、それがコソボで起こった現実だけれども、その反対側でアルバニア人がセルビア人に対してやっていることも全く同じです。だから両方見ないといけない。

これはこの家に屋根を建てた時です。彼がドライバー兼通訳です。周りから材料を買い付けて、運搬させてドアトゥードアで家の前まで持ってきて、今これは外へ出るところです。その後は彼らは親戚中よってたかって取り上げる。後で出てくる。これです。だから日本の昔と一緒にです。みんなが集まって。まず大工というわけではなくて全部自分たちでやってきた。その代わりに日本円にしたい30万円ぐらいの材料を与えるけれども、最初僕らの計算では18人が1つの屋根に入らないと状況はよくなると思っていたのだけれども、僕が着いてからいろんな家のパターンを見ていると18人はやっぱりちょっと多過ぎると判明する。結局みんなと相談した中で僕は理路整然と12人ですということ、結局12人になりました。例えば1つの家族が6人だったとしたら、もう1つの家族の家が完全に崩壊したか、それとも屋根が完全に焼失した人の家族をもう6人迎え入れる約束で屋根を立ち上げた。それはあげるけどちゃんとしてという契約をして後でモニタリングをする。モニタリングをしてちゃんとそれが守られているかどうかを調べる。

なぜ面倒くさいというか、そこまではするかというと、さっきのユニセフの話ではないけれども、なおかつそのお金は僕たちのお金ではない。世界中の個人から来たお金を僕は代行しているだけであって、

例えば古畑さんが500万円MSFに寄付してくださいました。ありがとうございますとこっちで500万円使いました。古畑さんは「いったい俺の500万円を何に使ったのか。吉川、ちょっと説明してくれないか」といったらその時に契約した契約書を持って「はい、こう使いました」と個人のサインもしてあるし法的にも全く問題がない状態をとるのが国境なき医師団のやり方です。なぜならば個人対個人だから、それはちゃんとやらなければならない。そういうシステムで屋根を建てました。

国境なき医師団でそれをやるのは初めてだといいましたが、本当に初めてです。だから医療活動に対するノウハウは非常に高かったが、さて家を建てるのと例えばその地域の家の建て方とか家族構成とか、何世代の人たちが1つ屋根の下にいるかは本当に来て1週間でリサーチして結論を出さなければならない。早くしないといけない。しかしそこで18人という数字が出てきたのはやっぱり間違いだった。間違いだったことは間違いだったけれども、それは後で軌道修正したのでよかったのですが、そういうことが確かにいくつかありました。それは後に軌道修正して、技術的なことも直していった最終的には1,000軒建てるといっていたのが800軒でした。

なぜ800軒で済んだかということ、ピースリングジャパンのレイコちゃんも私たちも屋根をかける、ブルーシートの。木とブルーシートをみんなに配ります。1人の部屋だけかかるように材料を渡した。1人の部屋だけ屋根をかけることは実質的に不可能ではないが、そんな難しいことをどうやってするのかと聞いたら、こうやってああやってと説明していたけれども、そんなことはナンセンスだと。そんなことは止めなさい。僕らのやり方をそのまま踏襲した方がいいよと説明して、彼らは東京の本部に持っていくとあって、僕らと同じ方法を取るようになった。

もともと一番最初に国連難民高等弁務官事務所がコソボの冬はブルーシートでのしげますと宣言した。そんなばかなことはない。我々がアフガニスタンでも活動しているし、雪が多い所、例えばグルジア共和国でも、チェチェンもそうです。絶対に気管支系疾患が激増する。激増して病院に全員来られても病院が壊滅的な状態なのにパニックになって冬にはむちゃくちゃになると、国連に説明しました。それでも国連は大丈夫だといいい切りました。そうか、分かった。もう説明しないとあって、国連の話だから

他のNGOはみんな聞いている。だからうちもブルーシート、うちもブルーシートとあって、うちだけがそんなばかなことはない。瓦を建てつけるまではできないが、厚いトタンまではできるのではないかと技術的にリサーチして、だいたい30万円ぐらいでいこうとなりました。どこから物資を運び入れるか。完全に戦争状態の所にどのルートからどこで仕入れてということをもた1つのチームでやります。周辺国を回って、材木商に買い付け、安いところで買い付けて、ルートを作って、トラックを雇ってというチームを1つ作りしました。それは1つは国連に対する見せしめです。お前ら、俺らを医者だと思っているだろう。俺らは医者だけではない。俺らにはロジスティックというやつがいるというのを見せつける。僕がいるロジスティックは無法者といわれていますが。そうするとシステムは確実に変わるだろうと僕は確信していた。

2カ月の間で1,000軒建て切らなければならないので寝る間も惜しんで、だいたい毎日朝の8時から晩の10時くらいまで働きました。毎週1回国連のミーティングがあります。それにも出ました。そのたびにリストを見せて、200軒建てました、300軒建てました、400軒建てましたと。そうすると他のNGOの国連もさっき見たようなトラックに積み込まれた材木を買って、彼らはお金を持ってきました。国連でやる。それでも材木は一切来ない。なぜかというとならば命令するだけです。結局国境を越えられない。税関に停められて。ところが国境なき医師団はその隣の国でも活動しているから、ずっと国境に立っていて国境の管理している兄ちゃんに「通してな」という。毎日20台、30台のトラックが入ってくるのに国連には1台もない。

そうしたらどういう現象が起こるかというのと、他のNGOは何かこれはおかしいと。俺らは国連のことを今まで信じてやってきたけれども、これはおかしいと。ちょっと国境なき医師団に聞いてみようと思った。そうかこういう手があったのかと。いってどんどんみんな同じ方向を向いてくれる。そのうちアラブのお金持ちが来て、屋根を建て始めたとかグッドニュースがいろいろ入ってきて、どんどん建つ量が増えてきたので結局我々が1,000軒建てなくてもコソボの冬は全員が、基本的には過せた。

それはすごく戦略的でちょっと大人気ない感じも多少あったのだけれども、ちょうど500軒建てた時に、

無線で「500軒建て終わりました」といっていたら、「おめでとう、よくやったねロジスティックのならずもの」といっていたら、しばらくして「ノーベル賞いただきました、ちょっと早めに帰ってきてね。乾杯しましょう」。あ、そうみたいな感じでした。ただ地元の人たちはすごく喜んでくれました。いっしょに働いていたチームメイトは。

国境なき医師団の給料はすごく安くて、仕事は朝の8時から10時までしているから基本的には辛い。僕はだいたい1日車で200キロくらい移動していたからドライバーも結構大変です。それで国境なき医師団はいつも一番最初に入るから、優秀な人材を全部取る。一切取らないのは医療関係者です。看護婦さんは絶対に通訳に使わない。なぜかという看護婦さんは看護婦さんでいてもらわなければならないから。でもドライバーもコックさんも、アイロンをかけてくれるおばちゃんもみんないい人です。一番最初に行くから一番いい人を取るわけです。そうすると次に来たお金持ちのNGOは人材が欲しいからすごく高い給料を出して裏でヘッドハンティングが始まる。誰も国境なき医師団に対して不平不満もいわず安い給料で朝から晩まで働いてくれます。それはたぶん誇りだと思います。僕たちだけではなくて世界中のあちこちで僕たちの仲間をやってくれていることに対する誇りだと思います。

さっきもいいましたが、国境なき医師団が家を建てる時に誰に建てるかですが、嘘を本当につくやつがいるかという話をちょっとしましたが、彼らは本当に嘘をつく。テントで生活をしています。テントを張っています。僕が何日にその村を訪れるかを知っています。僕が全部決めるので、全責任は僕にあって、僕が何日にその村に行くといったら村人は待っているわけです。テントを張って何かを敷いて、「どこで寝ているの、お母さん」と聞いたら「ここです」と。のぞくと全然生活臭がしない。「どこでご飯を食べているの」といったら「表だ」と。「どこで料理しているの」といったら「台所がないので隣の台所を借りています」と。「そうですか。ちょっと見せてもらえませんか」といって隣の家の台所を見せてもらう。そうするとどんどん嘘が見えてくる。最後の最後にテントをひっくり返すと、下の草が青々としている。そこで寝ていたらつぶれて枯れているはずで。そこであなたは嘘をついたから屋根をもらえないのではなくて、「あなたには子供がいて誰と誰がド

イツで出稼ぎしているの」と聞くと、「1番目と2番目です。」「じゃああなたはお金持ちだね。」「私はお金持ちじゃない。」「本当か」といって「これは何」「パンツ」「このパンツはドイツ製だね」と洗濯物までひっくり返して「これはフランス製だね」。そこまでやって追求しないと本当に困っている人は見つからない。

みんなが嘘をついている、僕はそれを悪いとは思わない。この人が倫理的に間違っているとは思わない。俺も必ず同じ事をするでしょう。古畑先生も必ずそうするでしょう。嘘をつくはずです。でも僕は見抜くためにそこへ行く。それはすごく卑しい仕事だと思ったこともあったし、悪夢というか眠れない夜を過ごしたこともコンゴの時はあったけれども、コンゴに行ってもうこれでは日本には帰れないとか、もうお茶漬けも食べられないと瞬間にでも思ってた生きて帰って来た時に、でもやっぱり俺のヒューマニズムは間違っていなかったなと感じました。きれい事ではないといういい方もあまり好きではないけれども、それぞれの人にそれぞれのヒューマニズムがあっていいはずだし、ただそれを例えばステレオタイプといういい方もおかしいかもしれませんが、絵に書いたようなヒューマニズムみたいなものはユニセフに代表してやってもらった方がいいのではないかと思います。だらだらとしゃべっていますが、今度は質問を受け付けます。何かないですか。

質問と応答

質問者 A ちょっといいですか。国境なき医師団の活動を見たら、やっぱりアフリカとかコンゴがありました。例えばこの身近でも北朝鮮とかイランの問題とかがいわれています。この場合に例えば国境がないからぱっと行けるのかどうか。

吉川 日本人は北朝鮮には行けないが、基本的には北朝鮮プロジェクトは始まりました。ただあまりにも政府の搾取が多すぎて、このまま続けたら政府の高官だけを太らせることになるので状況がより悪化するだろうケースなので北朝鮮プロジェクトは閉じました。ただししばらくしたらもう一度再開すると思います。ここにも書いてあったと思いますが、基本的にパスポートは持っていないなくても飛べますし、帰って来る。

さっき僕はグルジア共和国で逃げた話をしまし

た。逃げて帰ったのはパリに2度も逃げて帰ったのだけれども、実はグルジア共和国はこうなっていました。地図を書きます。ここがアブハジア州で、この辺がオセチア。僕はここにここからトビリシを通してパリへ帰って逃げた。ここにスフミという町があってここは黒海ですが、こっちはロシアです。こっちはトルコです。基本的にはここはソ連時代の高官の高級リゾート地です。とてもきれいな所です。この戦争の被災地はほとんど何もない所です。いわゆる農産物以外は何もない。フリーマーケットではビス1本、取れた乳母車の足、女の人のハイヒール片一方、そういう店が立ち並ぶような所です。

ここはだいたい30キロぐらいの幅で停戦ラインがあって両方にチェックポイントがある。この病院も直してくれというので直したし、こっち側も直してくれといわれてここに僕のような人がいなかった。「行ってくれませんか」というので「分かりました。はい、行きましょう」と8時間かけでここまで行きました。それでここを通る時こっち側は30キロずっと地雷原です。だから、止まらない場所だけど、ここも停戦ラインがあります。停戦ラインのこちら辺で猟をしている猟師がこっち側のグルジアでつかまりました。つかまってこっち側の捕虜になっているグルジア兵と交換しようとしたところ、そんなことはしないと行ってここがまた封鎖されました。こっちはロシアです。そうしたらここから出られなくなった。30キロの停戦ラインから。地雷です。出られなくなった段階でここから撤退しろと。この辺がチェチェンです。チェチェンマフィアはこう来るわけです。一番近いのはここです。ここでポルトガル人が拉致されて何万ドルか支払ったという話があって、それがここに着いた日です。それでも危ないので撤退しよう、もうここへ戻そうと話が決まった時に僕はここにいた。ここからどうやってここへ行くのかといったら、ここから1回ここに行って、名前を忘れましたがロシアの一番近い、ここは車で2時間半ぐらいで飛行場があって、そこから飛行機でトビリシまで飛んで、車で行ってトラックに乗って帰ってくる。しかしここまで行くのに国境がある。ロシアに入るのに。僕はロシアのビザを持っていなかった。本部に何とかしてよといいました。それでさっきの話ですが、パスポー

トがなくても帰って来られると訳の分からないことをいわれて、そんなことない絶対捕まるからといって、誰かビザを取ってきてといったら、女の人が僕のビザを持って帰ってからこう来てそのビザでこう行った。

実際はもしもここが完全に封鎖されて、前は3カ月封鎖されていたみたいだけれども、どうしようもなかったら国連軍のヘリコプターでこっちへ飛ぶしかなかった。1回僕がそれに乗ったらこの国ではもう二度と僕に対する信用がなくなる。戦争している所に国連軍が来て「君たち、やめろ」と鉄砲を撃ってくる。「まだ続ける」といつているやつに鉄砲を向けながら、「やめておけ」というわけです。そうしたら国連軍は第3の敵です。僕らはニュートラルだから国連と一緒にいることをいつも避ける。そうしないと標的になる。「やっぱりお前らも一緒じゃないか」と。他に何か質問ありますか。

質問者B (マイクが遠く聞き取り不能)

吉川 簡単にいったらいわゆる既成の価値観みたいなものが、例えば日本にもあるだろうし僕が活動しているヨーロッパにもあるわけです。その価値観自体を僕たちは呑み込みにしているというか当然のことのように受け入れている。それに対して1つ1つ、例えばこれはなぜ赤いのか、なぜポストは赤いのかと検証することはしない。例えばルールに入ってきてこの絵はなぜ美しいのかと思う人はいない。でも僕の絵を見た時にこれはいい絵か悪い絵か判断しようという人はいた。その合意はいったいどこから来るのか。僕は何もかも自由であることはない、できないと思うけれども少なくとも自分のクリエイティブな部分に関しては自由でありたいと思う。例えば絵も見たことがないし、音楽会にも行ったことがない人がいる。例えば車にも乗ったことがない人がいる。まさしくコンゴはそういうところですよ。それでは彼らの感性は鈍いのか。例えば彼らに何かを聞かせてあげて彼らは感動しないのか。そんなことは全然ない。我々と全く同じように感動する。でもまたそれは全然違う合意の中で、合意がなくて新しいものをどんどん吸収するかのように感じるというのか。そういうふうにも自分もなりたかった。

質問者C 吉川さんは彫刻家でありながら、ロジスティシャンをなさっているのですが、私は吉川さ

んみたいなお仕事を自分がやってみたくは思っていますが、それを本当に職業としてやっていくのは可能なのか？

吉川 可能です。僕らの仲間でスーパーロジスティシャンという人がいます。僕も基本的にはそのキャリアの中にいますが、僕はそのキャリアを積みません。なぜならばそのキャリアを積むと、首都にしかいることができない。これをフィールドと呼んでいますが、本当に目の前で活動する所には行けない。パリの事務所に机があっている。それほどつまらないことはない。それはできます。

もう1つというと、職業という概念が、僕にいわせたらそれで食っていくという話でいうならば、やめておいたほうがいいのではないかぐらいの気がします。1人で生きていくとか、家族のためとか。僕はたまたま自分の彫刻家としての仕事の中で蓄えもあるし、寛大な奥さんもいるのでやっていけますが。金銭的には非常にタフだと思います。ただ国境なき医師団にこだわらなければ、例えばジャイカだったら十分お金がもらえます。ただそれがどうなっているのかはよく知りません

質問者D (マイクが遠く聞き取り不能)

吉川 いえ、僕みたいなお仕事をしている男です。女の人は国境なき医師団オランダにはいるらしい話は聞いたことがありますが、お目にかかったことはないです。僕らの仕事にはない。ただ看護婦さんとかお医者さんとか事務局の長の仕事は女の人にもいます。全体としては半々ぐらいです。国境なき医師団の団とか。国境なき医師団の子供とか。国境なき医師団の離婚とかいろいろあります。

質問者E ロジスティックは国境なき医師団の医療を通じてそれが医療を行うにはロジスティックが必要なのでできたのか、それとも最初からこういったロジスティックが必要なのであるのか。

吉川 全く前者です。だから最初はそれこそパスポートも持たずに飛び出していった医者が出て、それでロジスティックスと一緒にやりながら陳情することがとても困難だと判明した。

もう1つ付け加えると1971年に生まれたのですが、その頃パリでは学生運動の嵐が吹き荒れていました。だから同じ大学紛争の真ただ中で生まれた。それは生意気なやつらばかりだった。その経緯の中で生まれているからとりあえず夢を追いかけろ、医者なら行けみたいな話で行ったらどう

しようということが多々あったのだろう。その頃
の人は黙して語りませんが。ただその後の人から
聞くとやっぱり大変だったと。だからロジスティ
ックスを作ろうとなった。他には。

質問者 F 先ほど下でいろいろ聞かせていただいた
のですが、いろんなボランティア団体がありますが
その中で、なぜ国境なき医師団の活動を選ばれ
たのですか。

吉川 僕がなぜ国境なき医師団を選んだか。

質問者 F はい。下で聞いた時は大震災の時の関わり
方が、と聞いたのですが。

吉川 とりあえずやっぱりそれは一番早い。この間
のエルサルバドルの地震の時も、インドの地震の
時もやっぱり1番でした。それは1,000人キットと
いうのがある。箱に入っている分で1,000人キット
で人々が1カ月生活できる。1つで1,000人が1カ
月生活できる。それにはシャンプーも歯磨き粉も
入っている。これを持っていけば大丈夫。地震が
起きました。政府の発表で死者350名。嘘だ、そん
なはずはない1,000人キットを20個送れとなりま
す。つまり2万人分です。とりあえず適当に2万
人分送って、24時間以内に行き、搬送して開け
て配ってをやって、そこからまた情報がどんどん
入ってきて、もう20箱、外科手術キットを送っ
てくれとか、例えば車3台用意してくれとかと進ん
でいく。とりあえず緊急の時に使うキットは完全
にシステム化されている。それは早いし、理にか
なっている。

なぜ今日の私の講演のためにクリスタルガイザ
ーを選んできたのかよく分からないけれども、
安かったからでしょうか。そこまで彼らは追及す
る。だからこれが60円だったらこっちはジャスコ
へ行ったら45円だった。こっちに入れ替えようと。
ある意味そんなことばかりいっている。だからい
かに安くキットを成立させて、いかに早く現地に
届かせて、いかに効率よく救助を始めるかだけを
考えている人がいる。

それはちらっと研修の風景が見えましたが、あ
れはコミュニケーションのための風景ですが、あ
の後から2週間パリに缶詰状態で研修を受けます。
後半1週間はボルドーのロジスティックセンター
で徹底的にやり方を教えられる。何でこれがこう
なのか。例えばアスピリンの箱の包装が多い。も
っと簡易包装にすると軽くなる。それ1個の単位

は知っているけど、何万個となったらこの重さだ
けでロスがある。徹底的な費用対効果を研修する。
そこら辺はもうすごいと思います。

だから神戸に着いたのもやっぱり1番です。僕
はその時国境なき医師団が日本にあるかは知らな
かったけれども、明け方に地震が起こって、その
日の夕刻には4tトラックに水を満載して神戸に
着いた。それもまだ国境なき医師団日本は事務所
を開いたばかりです。でも来ている連中は百戦錬
磨です。危ない所とか戦場をずっと世界中でずっ
と転々としてきたやつが東京へ来て事務所を開く
準備をしていた段階でそれが起こった。だからや
るのだったらMSF、でもお金が欲しい人は国際
赤十字かな。

コンボに行った時に僕らロジスティックとして
選ばれた7人は当然スターではないが、みんな知
っている。だからヘッドハンティングがすごい。
僕はフランス語と英語とイタリア語がしゃべれる
のだけれども、ペアという町は国連の送り込んだ
軍隊がイタリア軍だった。僕は通訳をいろんな場
面でしていたけれども、イタリアのNGOもたく
さん来ていた。その人たちが「恭生、この任務が
終わったらとりあえずミラノで1週間遊んで、そ
の後月額7,000ドルでどうだ」といいます。そう
いうことが日常茶飯事で実は起こっている。でも
やっぱりMSFは1番だと僕は思います。

質問者 G 新聞で見たのだが、子供のワクチンが1
本しかなくて、打ったとしても3日しか命が延長
できない場合があったとしたら、どう考えるか？

吉川 難しい質問だと思います。僕たちに政策の自
由があるのは打つか打たないか。その1本が3日
で死ぬと思われると？

質問者 G ほぼ100%。

吉川 僕は医者ではないので分からないが。

質問者 G その時は、国境なき医師団では、看護婦
さんの判断になるのか？

吉川 そうですね。でも僕がその現場にいた時から
やっぱり打つでしょう。

質問者 G 国境なき医師団でそういう時の統一見解
はないのですか。

吉川 ないです。ここに出ているこれがたぶん唯一
の、「国境なき医師団は、普遍的な医学倫理と、人
道的な救済の権利の名のもとに、何にも妨げられ
ることなく、その職務を中立と公平な立場で行う」。

結局医学倫理が普遍的なところで、いったい何が普遍的なのかということはあると思います。それは現場に立った人たちがこれは普遍的だと決めるしかない。

もう1つ、たぶん組織の中で僕が非常に驚いたのは、国境なき医師団には命令系統がない。さっきいった撤退しなさいというのだけが絶対服従だけれども、僕らはフィールドにいるので一番たくさんいる人たちです。その人たちがさっきの何人かの人を1つの屋根の中に入れるかという話で18人を12人にした話をしました。それは僕が決めたわけです。それが次に上へあがって行って、パリは事後承認するわけです。そういうふうに変ったのかと。ただ日本のNGOの場合は現場サイドで「18人はきつい、12人だ」というのを東京へ1回戻して、東京がそれならどうしてもよいと許可をもらわないと動けない。ところが国境なき医師団はそれがありません。だから今の話でもその看護婦さんが私はこういう考えでこう打ちましたというのでOKです。そういう場合はこうしなさいとはいわない。

例えばもっとやさしくいうと、1つのエピソードがあります。僕がコソボにいる時にワインを飲み過ぎて、疲れていたのもあったのですが、ふと目が覚めたら9時半頃だった。ぱっと外を見たら車が全部出払っていて、事務所まで行けないので無線で事務所を呼び出して、車を1台回してと行った。そしたら車が1台来て、事務所に9時半頃に行きました。「ちょっと寝坊してごめん、ごめん」という感じで入って行きました。そうしたら責任者がむっとしている。「ちょっと恭生、話があるからこっちへ来い」と彼の部屋へ行きました。「お前は どうして謝るのか。誰かお前に朝7時にここへ来て仕事をしろと命令したやつがいるのか。誰もいないだろう。お前が疲れていたら休めばいい。

休み過ぎて仕事の上で支障が起こるのだったら、お前に直接いう。お前が決めてお前がやる。それがMSFだ。」確かにそうだと分かっている。「ごめん、ごめん。ちょっと寝坊して」といった感じで行ったらものすごく怒られた。誰もお前に朝から事務所に来て来いとはいっていない。だから謝るなという。それですみませんという、ほらまた謝ったといわれる。それがMSFです。

そういう感じなので、どこへ行っても、どこか別の国に行った時に国境なき医師団の事務所がある。働いていないけれども中に入って行って、「私はこうこうこう」というと「ああ、知っている恭生だろう」とか行って「夜も遅いし、泊まってくか」といわれる。当然お金は払います。食事も割り勘とか。だからどの事務所でも自分の家と一緒にです。だからコンゴで捕まってキンシャサの事務所に帰ってきた時も、何も面識がある人たちでもないけれども大昔から友達のような感じ。そういう家族みたいな感じです。

司会 よろしいですか。ありがとうございました。

国境なき医師団の活動については確かネットで見ることができますね。

吉川 国境なき医師団で検索をかけたら出てきます。頻繁に更新しているホームページではないけれどもいろんな情報が見られます。英語が分かる方はMSFインターナショナルにアクセスするともっといっぱいいろんな情報が出ています。写真も出てきます。

一言最後に。たぶんみなさん学生さんで、語学を取っていると思います。語学はやっておいた方がいいです。やり足りないことはないです。僕は彫刻家だけれどもフランス語もイタリア語も英語もしゃべれるのはなぜかという、おしゃべりだからです。

司会 ありがとうございます。

国境なき医師団の概要

国境なき医師団は営利を目的としない国際的な民間の援助団体です。年間約 2,500 人が医師、看護婦、助産婦、物資調達要員として世界 80 カ国で援助活動を続けています。

国境なき医師団は「天災、人災、戦争など、あらゆる災害に苦しむ人々に、人種、宗教、思想政治すべてを超え、差別することなく援助を提供する」という理念に基づいて活動しています。

【設立】 1971年12月 フランスにて

【組織】

18ヶ国に19の拠点（うち5ヶ所が医師団派遣の決定権を持ち、医師団を組織）また、ボルドーには物資援助センターがあり医師団の活動に不可欠な物資の供給を行っています。

【活動分野】 1.自然災害 2.武力紛争 3.難民キャンプ 4.長期援助/技術援助
5.国内支援

【財源】

(1999年)

個人寄付 57.8%

公的資金（国連難民高等弁務官事務所、欧州連合、各国政府） 42.2%

国境なき医師団国際憲章

-国境なき医師団は、天災、人災、戦争など、あらゆる災害に苦しむ人々に、人種、宗教、思想、政治すべてを超え、差別することなく援助を提供する。

-国境なき医師団は、普遍的な医学倫理と、人道的な救済の権利の名のもとに、何にも妨げられることなく、その職務を中立と公平な立場で行う。

-国境なき医師団のメンバーは、その職業道徳に従い、全ての政治、経済、宗教とは関わりなく任務を遂行する。

-国境なき医師団のメンバーとその権利の継承者は、任務中に生じる危険及び損害に関し、国境なき医師団によって支払われる補償以外のいかなる補償の権利も要求しない。

歴史

国境なき医師団年表

- 1971年 国境なき医師団設立
- 1972年 最初の自然災害援助：ニカラグア地震
- 1974年 最初の長期医療援助：ホンジュラス
- 1975年 最初の戦時下援助：レバノン
- 1976年 最初のフランス全土での広報キャンペーン
最初の難民援助：タイ難民キャンプの開設
- 1978年 アジア、アフリカ地域での難民キャンプで活動開始
- 1980年 最初の世界規模での呼びかけ：「カンボジア救済のための大行進」
最初のヨーロッパ支部設立：ベルギー、スイス、オランダ
アフガニスタン国内へ最初の医師団出発
- 1984年 世界20ヶ国で活動継続
特に重要なプロジェクトはエチオピアでの食料援助
- 1985年 国境なき医師団フランス、公益法人として認知される
最初の告発行動：エチオピア政府による援助物資横領
- 1986年 スペインとルクセンブルクで支部設立
- 1987年 国境なき医師団フランス、公益事業に指定される
フランス国内での連帯事業開始
- 1989年 東側での最初の援助活動：アルメニア、ルーマニア

ラオス、カンボジア、ヴェトナムで活動開始

- 1991年 国境なき医師団インターナショナル事務局設置
クルド難民救済のための大規模援助行われる（トルコ、イラク、イラン）
- 1992年 ソマリアを含むアフリカの角地域への援助活動
旧ユーゴスラビアでの援助活動
国境なき医師団日本事務局開設
- 1994年 ルワンダでの援助活動
- 1995年 チェチェンでの援助活動
- 1997年 ザイール（現コンゴ民主共和国）でルワンダ人難民キャンプにおける援助活動
- 1998年 スーダンの飢餓への緊急援助
ホンジュラス、ニカラグア、グアテマラにてハリケーンの被災者への援助活動
- 1999年 コソボ紛争により大量に流出したアルバニア系難民への援助活動東ティモール内乱によって発生した大量の難民への援助活動28年間の人道援助活動が評価され、1999年度のノーベル平和賞を受賞
- 2000年 グルジアとインゴースに流出した大量のチェチェン難民に対する医療援助

設立の経緯

第三世界での人道的援助活動を経験した2つの医師グループの出会いから、国境なき医師団は始まりました。第一のグループは、国際赤十字の要請でピアフラ内戦の犠牲者救済に参加した医師たちでした。第二のグループは、トニユス新聞の呼びかけに応じて1970年の東パキスタン（現在のバングラディッシュ）の悲劇の救援に、ボランティアとして参加した医師たちでした。彼らはそこで、開発途上国が自力では解決できない公衆衛生の問題と、多数の民間人が殺されるという戦争の現実を経験したのです。これらの犠牲者を前に、医師たちは責任を感じざるを得ませんでした。これらの悲劇はメディアによって身近に感じられたとはいえ、医師たちが行ってきた日常的な医療とはあまりにもかけ離れたものだったのです。これらの現場で医師たちは行政、法律、機構面での人道援助活動の限界を経験しました。例えば、ヒボクラテスの宣誓に従った職業倫理上の患者のプライバシー問題、被災地の行政に従わなければならない制約、緊急医療の技術面での未熟、等々です。

それからの数年間国境なき医師団は第三世界の援助を続ける大組織のためにその経験、知識、情熱をささげました。そして1972年のニカラグア、1974年のホンジュラスの独自の活動、特に1976年のリビアでの救援活動、さらに1977年に行われた最初の大規模な人道援助活動の広告キャンペーンによって国境なき医師団の名声は高まりました。しかし、国境なき医師団の発展に本当に寄与したのは、70年代終わりに第三世界に大量に発生した難民キャンプでの活動でした。

難民キャンプでの活動を開始

1976年には世界の難民は270万人に達しました。1979年には570万人を超え、1982年には1000万人になりました。難民キャンプの建設を進めているUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）では、何とんでも医師の不足が悩みの種でした。難民キャンプの現実、救援チームの大型化のなかで苦闘する国境なき医師団の新しい世代は、長期的な医療戦略にかかわる問題と直面しました。特に1979年、南シナ海を漂流するベトナム「ボートピープル」への対応をめぐる、メディアを通じた大がかりな活動が、純粋に医療援助活動のみを行うかで意見が二分しましたが、最終的には後者が採用されました。

1979年秋、クメール・ルージュ体制の崩壊にともなう混乱の最中、100人ものボランティアがタイとカンボジアの国境に集中した難民キャンプまで出かけました。難民のあまりにひどい健康状態に驚いた国境なき医師団は、数ヵ月後「カンボジアを守るウォークキャンペーン」を行い、世界の世論に人道団体がカンボジア国内の避難民救援に近づけない現実を告発しました。

国境なき医師団はソ連の介入のわずか数ヵ月後に非公式にアフガニスタン現地に入り、その歴史のなかで最も危険な救援活動を行いました。10年以上に渡り、550人を越える医師、看護婦がアフガニスタンへ向かい、犠牲者への医療援助活動に挺身し現地情勢を西側諸国に連絡し続けたのです。この時期ほど、国境なき医師団の独自性と精神性を示したことはかつてありませんでした。

1985年、国境なき医師団は1年以上飢餓と戦いあらゆる交渉を試みた後、食料配給を操作して住民の意思に反する移住を強行しようとしたエチオピア政府を世論に告発しました。国境なき医師団に与えられた代償は小さくありませんでした。救援チームは国外に追放され医療援助の放棄も強制されました。しかし、国境なき医師団の告発が国際世論の支持を受け、エチオピア政府はその不正な操作の中止に追い込まれました。

この時期活発に行われた国境なき医師団の活動は、その組織の充実と歩調を合わせていました。救援活動に参加するボランティアの数は年間 400 ～ 600 名まで増加し、時を同じくしてクロード・マリユレとロニー・ブロマンの尽力により、国境なき医師団の内部組織に重要な改革が行われました。その第一はボランティアへの補償を取り入れたことです。これによりボランティアは以前に比べ長期の活動に参加でき、国境なき医師団は経験豊かな人材を確保できるようになりました。さらに募金活動がその専門家によって実施され、国境なき医師団独自の活動資金を十分に集められるようになりました。1982 年には 2.610 万フランであった募金額が 10 年後には 19,000 万フランに達しました。最後に重要なことは、医療面での技術的なバックアップ（栄養学、ワクチン、疫病対策）、特に新たな職務（ロジスティック＝物資調達）の重要性が認識された点です。

1986 年から 1993 年にかけて、国境なき医師団は医療チームの活動を充分効果的にするために、ロジスティックの強化に力をそそぎました。1986 年のサルバドル、1988 年のアルメニアに起きたような自然災害時には、避難場所や衛生施設が設営されたことによって、医療チームが最もその活動を期待された最も医療効果の上がる災害現場のすぐ近くで救援活動することを可能にしました。こうした救援活動におけるロジスティックの重要性はますます増大し、国境なき医師団ロジスティックの設立を促すことになりました。サダム・フセインの圧政から逃れた約 10 万人のクルド族難民が流出した 1991 年の春、2 ヶ月の間に大型輸送機 75 機に積み込まれた 2,500 トンの物資が現地で難民の救援活動に従事する 200 人のボランティアに輸送されました。

国境なき医師団は 1990 年から東側諸国そして旧ソ連での活動を開始し、保健機構の再建に参加しています。また国境なき医師団はフランスやベルギーで公的な医療制度から見放された人のための医療援助活動を行っています。

同時に国境なき医師団は十分な情報のない地域での活動も行い、実効ある医療活動、現地の状況の証人としての活動、そして人道援助活動の限界の間で困難なバランスをとる努力も続けています。1992 年のソマリア、旧ユーゴスラビア、そして 1994 年に起こったルワンダの悲劇は、援助団体、さらには人道活動に対する国家の責任についての基本的な問題を提起しました。

国境なき医師団は世界最大の民間の緊急医療援助組織に成長しました。1987 年にはフランスの Grande cause nationale に指名され、1991 年にはヨーロッパ人権賞を受賞、また 1999 年にはノーベル平和賞を受賞しました。

国境なき医師団の活動

○自然災害 ○武力紛争 ○難民キャンプ ○長期援助/技術援助 ○国内連帯事業

1- 自然災害

地震、洪水、台風、火山噴火など、地球上のあらゆる自然災害の現場に国境なき医師団は緊急出動しています。

【活動の目的】

・有事に備えた派遣のための事前準備
災害多発地帯のモニタリング、様々な緊急委員会との連絡ネットワーク、事前警告システム、必要物資と「キット」の事前準備を行います。

・現地組織への援助

災害後の麻痺状態を緩和し復旧に務めます。医療援助と物資援助は被災者への心理的効果も大きいのです。

・物資援助

災害発生時には、避難所、シーツ、衣類、飲料水、食料等の迅速な物資援助が不可欠です。そしてどんな状況にも適応できるように、柔軟で効果的かつ自立したものでなければなりません。

・地方への展開

国境なき医師団は、すでに多くの危険地帯に派遣されているため、状況に応じて備えることができます。

【活動の種類】

・医療活動

最緊急事態： けがの程度によるけが人の分類、外科チームの派遣

緊急事態： 臨時診療所設置、医薬品や資材の配付、伝染病対策

復興段階： 現地医療設備の建て直し、医薬品のコンピューターによる管理と分類、技術指導

・保健事業

飲料水： 備蓄、保存、配給

衛生： 排泄物や塵芥の処理、排水

・物資援助

避難所建設： テント、シーツ

物資援助： 輸送、メカニック、通信装置の配置、食料配給

2- 武力紛争

世界中で、独立運動、市民戦争、民族紛争は絶え間なく、毎日のように人間が争っています。設立以来、国境なき医師団は戦争の犠牲者に救いの手を差し伸べてきました。

【活動の目的】

医療援助：

治療行為を中心に、診療所や病院の建設、破壊された設備の再建、状況が許せば予防プログラムの実施をします。

外科援助：

紛争地帯では、救急外科と二次的外科プログラム（炎症が消えてからの手術、形成外科）の二種類の外科治療が必要となります。

食料援助：

栄養失調を改善します。

教育：

現地の医療助手や専門家（検査技師、運動療法士等）を育成します。

証言／告発：

国際社会に向けての告発：国境なき医師団は紛争地域で活動することで、紛争現場の貴重な証人となります。

派遣国内部：

紛争の被害者達は、見捨てられ、孤立した存在である場合が多く、国境なき医師団が彼らの側にいることで、精神的支えとなることがあります。

【紛争現場での活動の特長】

相手国政府の許可を得て活動する場合でも戦争地帯での活動には多くの障害があります。

治安状態：

国境なき医師団のメンバーは、いつも危険な状況下で働いています。それゆえ、地下壕の設置や病院の保護、外出禁止時間の徹底等、安全対策を講じています。しかし不幸なことに、設立以来数人の犠牲者が出ました。（1989年にスーダンで国境なき医師団の飛行機が攻撃され4名が死亡、1990年にはアフガニスタンで1名が暗殺により死亡。その他、トルコでは2名のメンバーが8か月間監獄に入れられるという事件が起き、1987年には12名がソマリアのゲリラにより人質となりました。）

医師団メンバーの選択：

・紛争地帯への派遣メンバーには特別の条件が必要
・当該地域の地理、政治、文化についての完全な知識

・戦時医療などの専門技術

・忍耐力や外交的センスなどの幾つかの人的資質

的確な物資輸送：

・孤立した医師団活動を支援するための物資補給が必要

- ・困難な地帯でのボートや驢馬を利用した輸送
- ・物資輸送が途絶えた場合には医師団の自給自活も必要

3- 難民キャンプ

23,033,000 人の難民が世界各地に存在します。その内 6,631,100 人が 現在難民キャンプに住んでいます。また他の数百万人は、自国にいながら、戦火や災害を逃れるため故郷を離れ、国内難民となっています。このような難民を救済するのは、国境なき医師団のもっとも重要な活動です。

【活動の目的】

難民キャンプでの活動の目的は、医療援助と、特にキャンプの不衛生な環境による死亡率を下げることにあります。

食料配給：

栄養失調の子供達の調査と給食センターの設置：重症者に対しては、医師の監督のもと、集中治療センターや補給センターを設置します。

医療援助：

・予防：伝染病予防ワクチン接種を行い母親、子供を保護します ・治療：病院や無料診療所での診療を行います。伝染病患者のために隔離病棟を設置します
・伝染病関係の情報収集-情報に基づいて医療計画を立てます

保健衛生：

飲料水： 確保と備蓄。1人1日5～20リットルの飲料水を配給します。
衛生： 排水、汚物処理、害虫の駆除を行います。

衛生員の育成：

医師団の活動を補助する衛生員を難民の中から育成します。

証言／告発：

難民キャンプの中に外部の国際社会の一員として存在することで、難民の生命や人権を脅かすあらゆるものに対して抑止となります。また国境なき医師団がおこなう告発により難民を保護することができます。

【活動の種類】

国境なき医師団は、難民キャンプの中で医療、食料、衛生に関する活動を行います。大きく分けて2つのタイプの活動があります。

緊急援助

・難民受け入れセンターとキャンプの設置：
センターでの調査で、食料や飲料水、医薬品、避難所設備の必要量を探ります。
状況に応じて、予防接種、負傷者や病人の症状の程度や栄養状態の調査を行います。
その後、難民はキャンプ内に収容され定住することになります。主な子供の死因とその対応策には次のようなものがあります。
・栄養失調： 栄養補給
・下痢症状を伴う疾患： 飲料水の浄化と治療
・呼吸器系疾患： 避難所の建設や、シーツや衣料の配付、治療
・麻疹： ワクチン接種
・キャンプ内での活動：
救急処置が一段落すると、病院、衛生設備の建設、教育等の長期的なプログラムが開始されます。

4- 長期援助／技術援助

医療や衛生の観点から見ると、発展途上国は、厚生施設、医薬品や機材が不足しています。医療従事者は量質ともに不十分なうえに、病院に片寄って配置されるなどの共通の問題を抱えています。こうした国では、十分な手当を受けられないがゆえに、日々何千人もの人々が死んでいくのです。

【活動の目的】

既存の医療施設を改善したり、新しく病院を建設したりすることで、医療的に恵まれない地域で死亡率や発病率を下げるのが一般的な目的です。それは具体的に、地方やスラムでのワクチン・キャンペーンや医療関係者の再教育なども含みます。長期、短期の様々なプロジェクトが行われています。

【活動の種類】

病院の再建：

病院の機能を正常化し、地域の医療の中心とすることを目的としています。外科の特別プロジェクトがこれに加わることもあります。病院の存在は地域の保健政策を活性化し、地元医療責任者の育成にも役立ちます。

食料援助：

住民の良好な栄養状態の維持と監視を目的としています。重度の栄養疾患の人々には回復センターや栄養補給センターを開設します。

ワクチン接種：

主な死因となる疾患や伝染病の予防や、すでに伝染病が発生している場合にはその伝播を防ぐことを目的としています。国境なき医師団は世界保健機構のワクチン・プログラムにも参加しています。

伝染病対策：

・飲料水の浄化と備蓄プログラム
これは、衛生状態を改善するための環境を整えようとするものです。良質で十分な量の飲料水を確保し、汚水や汚物の処理システムを整え、病原虫（蚊、蝇、蚤など）の駆除をおこない衛生環境を健全なものにします。

・育成

現地の医療関係者の育成は重要です。これにより、医師団の活動を徐々に現地医療関係者に委譲していくことができるようになります。

・伝染病学

伝染病に関する調査、分析、忠告を行います。

5- 国内連帯事業

国境なき医師団の使命は、どこであれ人々が助けを求めているところへ出かけていこうというものです。フランス国内でも、多くの人々が苦しみ、既存の社会制度の恩恵を得られていません。フランス国内での活動は、国境なき医師団が25年間世界80ヶ国で実践してきたことの延長であるといえます。

連帯事業の目的は、社会保障から除外されてしまった人々、失業者や不法滞在者、貧困に苦しむ人々を救済しようとするものです。こうした救済措置は一応的にも準備されていますが、手続きが煩雑で時間もかかり、また一般にあまり知られていません。

【活動の目的】

医療援助：

救急看護や応急処置を行います。

ケースワーカー活動：

国境なき医師団の救援センターに集まってくる人々を対象に実態調査を行い、社会復帰をめざします。

公的機関への働きかけ：

・通常の医療機関で手当てが受けられるような対策作りへ参加します。

・社会保障制度の不備を指摘します。

救援センター：

・この救援センターは、既存の医療システムの代用としてではなく、システムから排除された人々を一時的に収容し、既存のシステムへ復帰させようとするものです。

・最初の救援センターは1987年にパリ郊外サンドニに開設され、1992年にはフランス各地で5つのセンターが活動しています

・また、不定住者やホームレスを対象にした移動救援センターもあります。